

FRUITS



2010年7月 全国卒業生代表者会議 全国事務所にて

「FRUITS」は本年より発行された、全国の卒業生の交流と学生伝道支援を目的とするニュースレターです。

巻頭言： 高田 学 (2000年 法政大卒)

私にとってKGK卒業生会とは、クリスチャンの生き方を見つめなおし、育ててくれる場所です。

私が所属していた大学には、聖書研究会のような集まりはありませんでしたが、1年生の時からブロック祈禱会や、地区の活動に参加し続け、多くの祈りと学びの機会を与えられました。

また、主事や同期を始め、多くのクリスチャンの友人達との交わりが週に数回の割合で与えられ続けていきました。また、その友人達との交わりや、聖書からの学びを通してデボーションや祈りなど、日々の生活の中で神様と向き合っていくことについて多くの事を教えられていきました。そして、卒業する時には、働くこと、恋愛・結婚、そしてキリスト教的世界観、多くのことをKGKで学び、もう社会人になって何があっても大丈夫と、何の迷いも無く大学を卒業していった私がいきました。

しかし、社会人になった私を待っていたのは多くの挫折と、経験したことのない困難でした。幾ら頑張ってもうまくいかない仕事、次々と自分の足りなさが見つかる結婚生活、そして、クリスチャンとして誇ることの出来ない自分の生き方。。。卒業して出くわしたのは、そんな自分の足りなさばかりでした。

しかし、いつも多くの困難にぶつかり、心が折れそうになりながらも、クリスチャンとして歩み続けていくことができたのは、学生時代のKGKでの学びを思い起こさせ今の生活とリンクさせてくれる卒業生会での集会や学びと、学生時代から続く信仰の友人達との交わりがあったからでした。まさに、私にとって、KGK卒業生会とは、家庭や仕事、教会など全生活を通しての派遣意識を共有するクリスチャンの友人達との交わりの中で、自分を見つめなおし、育ててくれる、そのような恵みの場所なのです。

(特集) 東日本大震災 K GKによる復興支援活動

東日本大震災発生以来、K GKは諸教会やIFES（国際福音主義学生連盟）の変わりからも多くの励ましや支援を受けつつ、震災祈禱会、献金、ボランティア活動などに当たっています。今回は主事からの報告、現地からの声と、そしてボランティア活動の証しを分かち合わせていただきます。



宮城県多賀城市、七ヶ浜の被災の様子



主事会より、ご報告

今回の東日本大震災に際して、K GK では日本国際飢餓対策機構との協力関係の中で、復興支援ボランティアに学生達を派遣してきました。宮城県多賀城市の保守バプテスト同盟・塩釜聖書バプテスト教会が多くのボランティアを受け入れ、近隣地域の被災された方々へ仕えておられるのですが、K GKもこの働きに合流させて頂いています。仙台市内から車で40分程の塩釜近辺は津波の被害を受け、床上1-2m浸水し、1階部分は泥に埋まり使えない家が多くあります。K GKからのボランティアチームは教会に宿泊させて頂き、教会から派遣されたボランティアとして、教会が地域に仕えていく働きの一部を担わせて頂いています。

3/22 ~29 に第1陣が現地入りし、その後も5 ~10 名程のチーム（主事1-2名+学生数名）を4月末までは毎週、5月は2週間派遣してきました。学生達は関東地区を中心に北海道、関西、中四国、沖縄と全国から集められ、引率担当主事も関東・関西・中四国・九州から集まりました。また、卒業生5名も参加して運転の奉仕も含めて共に良い奉仕をして下さいました。現地では東北地区の成実朝子主事がオリエンテーションを担当し、東北地区の学生達が加わる機会もあり、5月末までに77名が参加しました。

また5月の連休には、岩手県宮古市で展開されているボランティアに卒業生7名と主事、GA3名を派遣しました。これはK GK理事の近藤愛哉師（保守バプテスト同盟・盛岡聖書バプテスト教会牧師）が岩手の諸教会と共に行っている沿岸地域でのボランティアに参加したもので、様々な教団やグループのチームと共に、物資配り、子ども遊び、清掃などの奉仕をさせて頂きました。

K GK としては、地域教会との協力のもとで必要のある場に派遣されていくボランティア活動をこれからも中長期で継続していきたいと願っています。

（関東地区主事 田中牧子）

東北復興支援のための、献金を受け付けています。

三菱東京UFJ銀行 神田支店 普通口座 6525901 宗教法人キリスト者学生会

東日本大震災と前進する福音—ピリピ1：12～14から学んだこと—

早坂良一郎（1974年 東北学院大卒）

私は宮城県多賀城市にある塩釜聖書バプテスト教会の会員です。この教会にKGKの学生がボランティアとして来てくださり、牧師も教会員も感謝しています。

3月11日は私たちにとって忘れられない日となってしまいました。午後2時46分に起きた大地震とその後の大津波は、私たちが営々と築き上げてきたものを流し去りました。

私たちの教会では、現在四ヶ所の家で開拓伝道をしています。そのうち二ヶ所が津波の被害で、家に住めなくなりました。仙台東部にあるO夫妻と家族は、4月から礼拝を始めようと祈り準備してきました。期待が大きかったために牧師はじめ教会員にとってショックでした。『礼拝が始まろうとしている矢先になぜこんな事が起きるのか…。』祈ってもわかりません。ただ現実を受け入れるだけでした。巨理の荒浜に住んでいたK夫妻は、地域に根ざした伝道と礼拝をしながら牧師と新たな学びを始めたところでした。津波が来たとき家に居たため二階からヘリコプターで救助されました。一階にあったエレクトーンや礼拝に使う備品をはじめ、すべての家財が流されてしまいました。

ピリピ人への手紙1章には、福音の後退になりかねないパウロの投獄のことが、「兄弟たちの大多数は、私が投獄されたことにより、主にあって確信を与えられ、恐れることなく、ますます大胆に神のことはを語るようになりました。」（14節）と書かれてれており、福音を前進させることになったと伝えています。

あれから2ヶ月以上がたちました。同じような事が私たちの教会でも起きていて、このような中でも家の教会は生み出されようとしています。K夫妻は内陸部にある団地に住むことになりました。いろいろな機材や備品が与えられつつあり、そこを拠点として宣教が開始されようとしています。O夫妻と家族は仙台の街の中に引っ越しました。農村部から移ったのですが、今まで培ってきた人間関係は健在で、宣教の熱き思いは変わっていません。仕切り直しのように見えますが、これから主はどの様に導かれていくのか期待して祈っています。

神の家族である日本・世界の兄弟の熱き祈りと支援物資・ボランティアに励まされています。私も人々に神のことはを大胆に語るように祈ってください。



左：塩釜での子どもプログラム

右：ボランティア作業の打合せの様子



「KGK関東・東北大震災 災害ボランティアに参加して」

大石 理絵（2000年 同志社大卒）

4月11日～15日まで、災害ボランティアに参加してきた。私は大阪に住んでいたの、震災の時は地震による揺れを少し感じたものの、事後の節電や余震などを経験することはなかった。しかし、震災直後からTVの被災地の様子を見るにつれて、この目でその現状を見て、自分にできることをしたいと思い、KGKがボランティアを派遣していることを聞いたので、早速問い合わせでボランティアへの参加を申し込んだ。（次項へ続く）



塩釜ボランティアチーム



岩手県宮古市の被災の様子



(前項から続き)

期間中、宮城県多賀城市にある塩釜聖書バプテスト教会に滞在し、朝から夕方まで、教会近辺や特に被害の大きかった石巻市の住宅に出かけ、津波の被害のあったお家の泥かきや家財道具の持ち出し、地域の店舗の掃除をした(ボランティアの中には学校がまだ始まっていない子供たちと公園等で遊ぶこともあった)。毎日5人くらいでグループを組み、3グループで活動にあたったが、これだけの人数をもって一日に自分達ができることは本当に僅かで、毎日「これだけしかできないのか」と痛切に思われた。またその作業の1つ1つが骨の折れるものであった。現地に行き、被害を目の当たりにし、あらためて、地震、特に津波の被害の深刻さ、甚大さを知った(しかしそれはほんの一部分にしか過ぎないことを覚えて)。

今回の地震の後に、国内外のあらゆる団体がすみやかに現地に救援活動に入ったが、クリスチャンの団体の対応も早かった。やはり私たちはキリスト者として被害に合っている方々を助け、必要に応える必要がある。それは慈善活動ではなく、私たちの信仰の体言化である。被災者の気持ちにより添い、主にある希望や私たちの信仰の確信を行動を通して伝えなければならない。そしてこの機会に主の僕として社会に仕えることを学び経験する学生たちを支援していきたいと思う。

「揺れ動く地にあり、主の十字架は輝けり」。復興の中に、主の十字架の御業を仰ぎ見、また疲弊している現地の教会の先生方や震災の被害に合われた多くの方々のために祈り、力になっていきたいと願っている。

宮古でのボランティア 蒔田真(2009年 国際基督教大卒)

主の御名をあげます。私はKGK卒業生の一人として5/2~5にかけて岩手県宮古市に派遣されました。祈りと支えをもって送り出して下さった方々に感謝します。

宮古では主に二つの活動に携わりました。一つは在宅避難をされている方々に物資を届けることです。宮古市の田老地区は街の大部分が壊滅的な被害を受けた地区の一つです。辛うじて自宅が津波の被害を逃れて在宅避難をしても物資を手に入れる術がない方々に、お米や野菜などの食料品や肌着や洗剤などの生活用品等を届けました。地域の教会が継続的に人を派遣する中で段々と新しい信頼関係が築かれ、生活面での必要に加えて人格的な必要にも応えています。

宮古でのもう一つの活動は、避難所で子どもたちと遊ぶことでした。長く続く避難所での生活は様々な面で大きな負担ともなります。避難所で暮らしている子どもたちは家を失っており、中には家族や知り合いの方々を亡くしている場合もあります。避難所には、DVDや本など、遊ぶためのモノは多くありました。けれども、ただ時間を過ごすために遊ぶのではなく、自分を受け止めてくれる存在との関わりが必要とされていることを、一緒に遊び、触れ合う中で、言葉の端々から感じました。

短い活動期間でしたが、一介のボランティアには、必要とされている多くのことに対しては全く応えることが出来ないというもどかしさを覚えました。けれども私は小さい存在だからこそ、そして一匹の羊のために他の全てを投げ出してまで救おうとくださる方を知っている者だからこそ、出来る働きがあることに気付かされました。大規模な復興支援はもちろん必要とされていますが、それだけでは手の届かない、一人の人に寄り添う思いをもった働きの必要も大きいのではないのでしょうか。小さく見える働きであっても、偉大なる主が大きく用いて下さるようにと祈ります。引き続き、必要とされる働きが速やかになされることを願います。

全国卒業生会 ニュースレター FRUITS 第1号 発行者：キリスト者学生会 VMP卒業生部会
発行所：宗教法人キリスト者学生会 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台2-1 OCCビル3F
Tel/FAX：03-3294-6916 <http://www.kgk-japan.net/>